日本海新聞

（11）　2011年（平成23年）10月4日　火曜日

潮流

NPO法人未来地域マネジャー　光森 明

「倉吉市立美術大学」

前回、力が入りすぎてホラ話のように聞き取られたことを深く反省し、今回は真面目に話をしたい。私が現在仕事をしている倉吉は、往時、生糸や木綿、稲扱千刃などの産品をもって県外へ打って出る進取の気風の土地だということは先回述べたが、もう一つ、このエリアにして信じられない厚みを持って盛んだったのが文化、芸術活動だった。

江戸時代の狩野派絵師、吉田保水までさかのぼっていくと果てしがなくなるので、近現代に絞ってみても中井金三の存在をきっかけに、前田寛治、前田利三、米本一郎、小椋繁治が現れた。姫路生まれで明倫小学校に赴任して来た長谷川富三郎を基軸にして加納告保、野崎信次郎ら版画、シルク・スクリーンでの才能がすぐ間近まで花開いていた。数え切れない美術界の人材を持っている倉吉が今現在、白壁土蔵群の小京都風情だけを目玉にして終わっているのは何とももったいないと思ったのだ。

結論から先に言えば、これだけの素地を持っている土地ならば、美術大学を設立しての芸術都市・倉吉市を再興してはどうかとの提案だ。国立や県立だったら設立に面倒な手間がかかるだろうから、思い切って手前みそでやれる市立の美術大学をつくる。十数人規模の単科校を、例えば旧明倫小学校円形校舎を教室という名のアトリエ・スペースに使い充てる。滞在宿舎は、本町通り周辺に点在する空き家をあてがう。既存の設備や家屋を、若者たちが考えもしなかった工夫や使い方をすることで「いまのままで良い」と町づくりに消極的な家主、住民を刺激し、総体として町並み活性化や移住定住促進につながる効果を想定している。

現在、町づくりに取り組んでいるNPO法人明倫NEXT100が挑戦しているアーティスト・イン・レジデンス（芸術家の短期滞在による創作活動）を、通年事業に拡大していく考え方だ。行政が市保有の施設を無償提供し、住民が不用にしている住居スペースを借り上げて、芸術家の卵を受け入れ、彼らがヒナに帰るまでの〝創作活動見守り支援大学〟のことである。

年に1回全国的なコンクールへの挑戦を受けることや合評会を兼ねた市民とのシンポジウム、創作現場を開放することなど市民、住民との積極的な交流を補足条件にした上で、入選を果たした折には、卒業してもいいという資格を、市民が授与するといった塾的風情を持ってもいる。

こう書くと、またホラの吹き直しのように思われるかもしれないが、しかし倉吉には文化芸術に挑戦する才能を支え見守り、援助する気風や気質、もしくは風土が確かに存在する。講師教授を招聘する大規模な費用掛りの話ではないし、現在ある市民住民の目を生かし、モノを有効に使い直し、日常生活の中に文化芸術を取り込み育んで来た倉吉魂の系譜を呼び起こそうとするものなのである。

わが倉吉市は大胆で永続的でユニークな施策に乗り出して、秋空の果てに待ち受けている鉛色の冬空を吹き飛ばしてほしい。萌芽は明倫地区ですでに見られるのだから、十分に確率は高いと思うがいかが？

（湯梨浜町）